論文内容の要旨

論文題目　　記憶としての日中戦争
――インタビューによる他者理解の可能性

氏　　名　　石　井　　弓

本研究は、中国人の戦争記憶について論じる試みである。特に、戦後世代の人々が、戦争をあたかも体験したかのように語るとは、如何なる記憶のありようなのか、また、それを如何にして理解することができるかについて検討している。

歴史学をはじめとする学問が、近代化や科学化を推し進めてきた結果、科学的な論理によっては捉えきれない事象が取りこぼされることに、人々は気付きつつある。そうした問題は、C・ランズマンによる映画『ショアー』が、虐殺を生き残った人々に過去を語らせることで、記憶の現在を描いたように、歴史学とは異なる分野から提示されてきた。本研究で焦点化する中国でもまた、「南京事件」の死者数を巡る実証的研究に対して異議が唱えられている。「南京事件」は中国人にとって「感情記憶」（中国社会科学院・孫歌）であるため、実証主義歴史学によっては捉えきれない記憶なのであると、主張されているのである。

日中戦争はこれまで、歴史学的に如何にそれを正確に再現するかに力が注がれてきた。だがそれとは別の次元で、戦争は記憶として保持され、2004 年のサッカーアジアカップでの暴動や、2005 年の日本製品不買運動、そして 2008 年の四川大地震での自衛隊派遣問題などにおいて表面化している。この感情的とも思える行動こそが、日中間の現実的問題を左右しているにも拘らず、史料実証を積み重ねる学問的探索のみによっては、この現象を説明することができないのである。一方、記憶を社会的要因によって構築されるものと捉

える構築主義的研究によってもまた、この問いに十分な答えを与えることができない。それらは記憶を扱いながらも、その焦点は記憶を形成する社会性にあり、例えば、絵画、銅像、博物館の展示などが分析対象となっている。即ち、記憶や記憶する主体から外在化された事象を取扱っており、人々がなぜそのように記憶したのかについては、論じていないのである。

本研究はこれに対し、記憶する側の条件を理解するため、フィールド・ワークと文献資料の双方の視点から記憶を分析していく。論の構成は、分析対象を国家、地域、村、村の中の出来事へと順に収斂させていく構成をとり、それによって近代的な国民国家の中で抽象的概念によって共有されている過去が、農村という顔の見える実体的なコミュニティーではどのように記憶され、共有されているかを考えていく。これは、抽象性にとらわれない議論のあり方を見出すための構成である。また、記憶する一人ひとりに近づいていくことで、中国人の戦争記憶の実態を、記憶する側の視点から理解することを試みると同時に、「記憶」という捉え難い対象をどのように論じられるのかという方法をも探求している。

各章では次のように論を展開している。

第 1 章では、記憶をどう捉えるべきか、また、中国の戦争記憶がどのような特徴を持っているかを論じる。ある一定のコミュニティーによって記憶が形成され保持されるとするM・アルヴァックスの「集合的記憶」論や構築主義的視点の導入によって、記憶研究は学問的な広がりを見せてきた。しかし、「感情記憶」が表現した戦争の記憶は、主体性を抜きにしては語り得ないものであり、なおかつその主体性を構築主義的に解体することをも拒むものであった。その一方で、その記憶は個人の直接経験によるものとは限らず、多様な社会的要因によっても形成されると主張される。ここから、中国における戦争記憶の「集合的記憶」を、「感情記憶」に示された複雑な主体性と社会性に留意しつつ、論じる方向性を提示する。

第 2 章では、戦争記憶を、まずは社会的表象の側面から捉える。史料として主に『人民日報』記事を用い、戦後中国国内で行われた三つの思想政治教育運動である「訴苦」、「四史」、「憶苦思甜」を分析対象として取り上げ、公的戦争表象の記憶化の問題を論じる。『人民日報』記述の変遷より、上から与えられる戦争表象自体も、時間の経過やそれに伴う人々の意識の変化を吸収して変化してきたことが明らかになる。そして、中国において国民国家の勝利の物語として位置付けられてきた戦争が、90 年代以降、如何にして被害の記憶に寄り添い、性暴力被害者が「幸存者」（サバイバー）としてカムアウトする土台が形成されてきたのかを論じる。

第 3 章から第 5 章にかけては、フィールド・ワークと文献資料によって調査地域における記憶の共有を論じている。山西省盂県の 32 村及び盂県城と太原市で行った延べ 175 名に対するインタビューが、3 つの章の主な資料となっている。各章は記憶を分析する切り口によって分けられる。第 3 章では、戦争の視覚イメージから記憶を論じる。聞き取り調査より、村人たちが広い地域で世代を超えて同じ戦争の夢を見ていることが分かった。彼らが

なぜ同じ夢を見るようになったのか、その視覚イメージは何によって形成されたものなのかを分析することを通して、記憶の共有過程を明らかにする。夢は露天映画上映に触発されて見られていた。しかし、そのストーリーは、老人たちの話す「無人区」（日本軍が設置した共産党軍との緩衝地帯で、村人はその地域から移住することを強制された）の経験に由来することを、調査より突き止めていく。また、記憶の共有が、集団農業という特殊なコミュニティーのあり方と如何に関係しているのかを論じる。

第 4 章では、地域で共有される素朴な歌である「順口溜（シュンコウリュウ）」から、村における戦争の語りを分析する。「順口溜」は出来事に託して自らの気持を歌う短い歌で、文字に記録されることは極めて少ない。だが、それらの一部は 100 年前から伝わり、今も記憶されている。ひとつの「順口溜」が共有されることは、歌い手の気持に人々が共鳴していることを意味し、村の語りとそれによって形成された「集合的記憶」を、この歌の中に捉えることができる。村で起こった戦争中の虐殺事件を歌う「順口溜」には、ひとつの歌の中に、通時的、共時的多様性が歌い込まれ、多様なできごとがひとつの過去を表すのに矛盾なく組み合わさって表現されていた。また、多くの「順口溜」に共通するテーマとして村の秩序の破壊が歌い込まれていることが見えてきた。村人たちにとってひとつの出来事の記憶は、様々な要因によって重層的に構成されており、また、戦争は、単に命や物を奪われるだけでなく、生活の場の秩序を破壊する行為として記憶されていることが、ここから分析される。

第 5 章では、ひとつの「順口溜」の伝達過程での変化を手がかりに、語りが如何に記憶化されるのかを考察する。歌の変化から、村人たちが過去の被害をむしろ自戒的に記憶していることが分かる。村で過去が語り継がれるのは、村の存在を証明するためであり、村人は村の人間関係の中に自らを位置付けることで、自らの存在を確認する。このため、戦争の過去はひとつの教訓として正確に伝えられなければならない。また、村人たちは世代意識によって過去を認識する。そこでは、自らと過去は地続きのものとして捉えられ、あたかも経験したかのように過去を語ることが、むしろ自然な行為なのである。「順口溜」が伝える過去は、こうして村人たちによって自らの記憶として歌い継がれていることが明らかになっていく。

本研究を通して得られた論点は次の通りである。第一に、記憶の研究手法にインタビューを採用したことで、他者の記憶を取り出して論じるのではなく、自ら他者の文脈に入って考える方向に論が転換した。それによって、第 3 章で論じた戦争の夢や、第 4 章及び第 5 章で論じた「順口溜」が見出され、それらを入口とすることで、語り手と聞き手の関係性を出来る限り離れて、記憶する側の視点から記憶を論じることが可能になったと考えられる。

第二に、過去を時間軸に沿って整理する歴史とは異なる記憶の構造を明らかにした。第 2 章では思想政治教育運動によって語られた戦争の記憶が、国家の戦争イメージに編みあげられていく過程を論じたが、それらは国の正史として書かれたものであった。しかしながら、村落コミュニティーでは、国家の歴史からは自律した村の戦争の過去が、意識的に語

り継がれていた。それは、共時的多様性と通時的多様性が矛盾なく組み合わされたひとつの世界観を形づくっており、村人たちはその世界観の中に自己を位置づけることで、自己の存在を確認するのである。村人にとって、過去は必ずしも時間の流れに規定されない様々な出来事の集積として、立体的に記憶されていることが分かる。

第三に、コミュニティー再生産の動的流れの中に人々の記憶を捉えた。村落コミュニティーにおいて記憶は、同じことの繰り返しである日常と、その中で発生した非日常との循環構造によって維持されている。村の日常は多様なルールによって決められており、そのルールからはみ出した出来事が「順口溜」に歌われることによって、逆にルールが守られる。過去が記憶され続けるのは、そのような循環構造が絶えず動的に成り立っているからこそであり、この意味で、記憶はコミュニティーと繋がっていると考えられる。過去の記憶は村人たちにとって村の存在や自己を規定する繋がりの中にあるものであり、このため、一人ひとりの村人は過去を自らの記憶と感じる。外在的社会的要因によっては語りえないもの、それはこのようなコミュニティーや人間関係の中で感得される過去のありようであろう。そしてこれこそが、孫歌が語ろうとして語り得なかった「感情記憶」の原型であろうと考えられる。